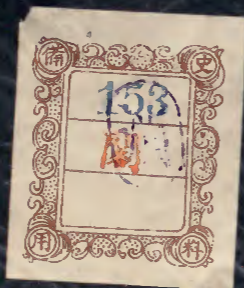


武德編年集成

五十一
五十二

貼

庫文閣内		和書類
二四九函	三三二九號	
三三三葉	五冊	
		(三廿九)



内閣文庫	
番號	和 33119
冊數	50 (33)
函號	149 113

共五十一



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

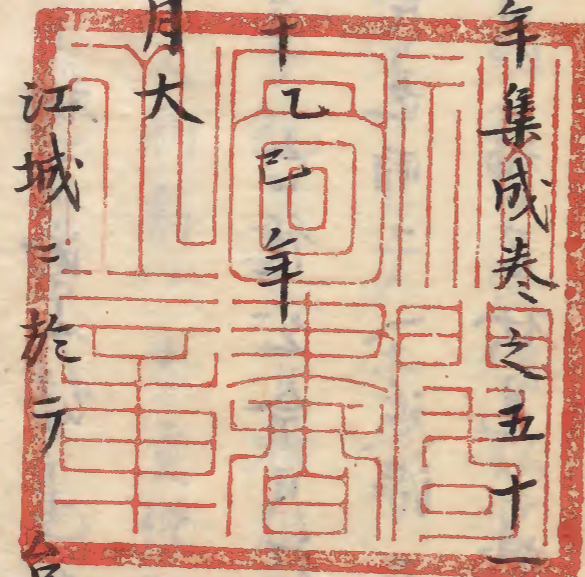


論153

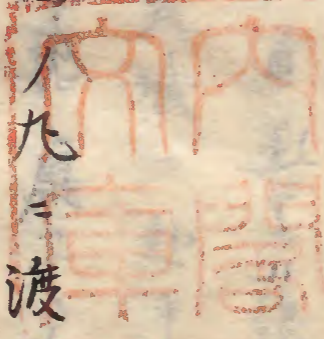
武德編年集成卷之五十一



慶長十二年正月大

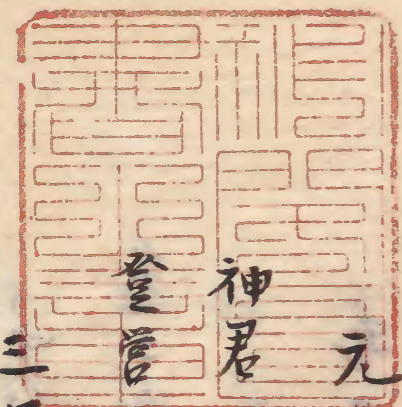


台德公西



木村高敦 撰

九渡御



神君 御對顏青陽ヲ賀ニ玉ヲ郡臣本丸西丸

賀儀ヲ述ル

三日 台德公 御上洛ニ依テ法令七ヶ條ヲ

諭ニ玉ヲ東海道ノ大河皆舩橋ヲ設ク

五日 若狭ノ国至京極忠尚正五位下ニ叙シ

侍後ニ任ス高次ノ子ナリ

九日 神君江府ヲ御祭駕アリ

中旬 神君後府迄御到着アリ淋疾ニ暫ク

爰ニ御逗留ト云ク

二月小

五日 神君御上洛トメ今日後府ノ城ヲ出與

之玉ヲ

十八日 台徳公今日江城ヲ御首途アルニ

ト云ハ尺甚雨ニ延滞セラル

十九日 神君伏見ノ城ニ着御宗對馬侍後義

智頃日朝鮮ノ使僧松雲孫文或ヲ携ヘ當城ニ登

テ拜謁アラシメ土叵ノ献ス 神君義智ニ命ア

リテ曰吾既ニ天下輔相ノ任ヲ 考志ニ讓ニト

ス近年又朝鮮ノ来貢使ヲ卒テ武城ニ赴キテ可

ナリトテ肥前田代ノ邑ニ千石ヲ加恩セラレ朝

鮮ノ僧玄蘇ニ紫衣ヲ聽シ飯朝ノ暇ヲ賜リ旦紫

カ乞フ所ト依テ往年佳因ヲ朝鮮ニ飯ナルニ

ト云ハ尺進ニ 台徳公御入洛ニ依テ松雲文或

等ヲ暫ク留置テ其人数ノ繁多ニシ旅装ノ美麗

ナルヲ觀スヘキノ音京尹板倉ニ 命セラル

廿一日 台徳公供奉ノ先豫上野館林ノ城主

榊原式部太輔康政ノ組佐野修理大夫正綱下野

城主石越前守秀久信濃小石川玄蕃及康長目松

城主今日武陽ヲ榮入鎌倉右大将家治世始ノ入洛

ニ准拠セリ其時先隊畠山重忠又リ先驅ヲ

以テ康政ニ是ヲ命セリ二番伊達越前守政

宗三番堀左衛門督秀治并溝口伯耆守直勝越後

城主四番甲斐府中ノ城主平岩主計頭親吉力組小

笠原信濃守長備信濃諏訪因幡守頼水日高

保科肥後守正友同高遠鳥居土佐守成次甲斐

五番上杉彈正大弼景勝六番蒲生元彈守秀行七

番下濃上城主本多出雲守忠朝力組真田伊豆守信尹

田信濃城主北條左衛門大夫氏勝相模松下右兵衛尉

重綱常陸八番大久保加賀守忠常小田原城主力

組高力左近大夫正長武藏岩皆川志摩守隆庸信

飯本多大学今正吉常陸江九番武藏川酒井右兵

衛大夫志世力組水野市正近勝鍋島和泉守田中

隼人正市橋小兵衛淺野采女正長次常陸同内膳

右九組ノ内毎日一組宛旅行ニ江忍大津ニ止リ

台徳公ノ著御ヲ待受夫ヨリ次第ヲ守リ上洛セ

己公一信甲ノ族ハ木曾路ヲ歴テ大津ニ至ル
ト云

北四日 台徳公江城御套駕アリ前駆鉄砲七
隊ノ輕卒六百人其長ハ服部石見守正成三枝土
佐守勝表川金右衛門氏後服部伴保次屋代越中
勝永加後劫右衛門正次細井金兵衛勝吉弓四隊
輕卒三百人其長久永源兵衛重頼佐橋甚兵衛吉
又倉橋内通久次青木五右衛門其次御鎗二百本
把荒草其奉行近友石見秀周都筑弥左衛門為政其
次ニ石督ノ望與片ノ早者金屋斗次ニ率馬九十

正次ニ鉄砲五十挺程々細ノ袋ヲ掛ル輕弓三十
張杖箱七荷長刀二振金屋斗次ノ服差ヲ持次ニ
台徳公御輿是ヲ昇者皆以步卒圍繞次御持鎗
五本持者金屋斗次ニ茶具尚是ヲ司トル 同明
次ニ青山圖書少重長進臣ヲ率次ニ安藤對馬
守重信小姓ノ輩ヲ率又次ニ使番次ニ大
善衛士其外土屋民部少輔志直高木主水正正次
二代目柴田七九郎康久安部弥一郎信盛内友新
五郎正成牧野九右衛門内友若狭守清次上杉源
四郎甚真土方河内守雄次友堂内通高琥溝口孫

左出門善勝西尾隼人須賀根津守勝政神谷弥五
郎宗弘秋山平左出門正次藤部民部良保柴田三
左出門勝政阿部備中守正次山名平吉危国八道
津田正藏正芳後改平服坂主水安信小出信濃守
吉英牧野傳藏成祇豫後任伊真田左馬次水野太郎
他永田三郎次郎木造左馬次青山常陸守志成水
野隼人正志清堀伊賀守利重水野讚岐守其次二
騎馬陪臣其監使永田善左出門重利其次步卒ノ
陪從奴僕其監使永井弥右出門白元其次麾下諸
士ノ鉄砲司石川八左出門正次永田庄左出門重

吉同弓司本多百女信勝二代目小沢瀨兵衛正重内
茂甚五左出門清政同鏡奉行山田十太夫重利朝
倉友十郎宣正同挾箱等々王朝倉宣正是々引下
心惣ノ麾下諸士ノ大砲十挺弓五百张鎗千本長
力百本挾箱三百ノ由沙汰七ノ人當月中台徳
公ノ御旅泊神奈川藤沢小田原三島大兩工三
今日御滞座卜云々
三月大
二日台徳公蒲原ノ旅營ニ着御此未ノ御旅
泊後府藤枝惣懸川濱松愛二一日吉田岡崎清例例

西日御大坂彦根一是雨云入爰二
逗留 永原卜云云

十七日 膳所ノ城ニ着御後後搦郡隊ノ至ル

爰ニ待玉ナリ三日ト云云

北一日 伏見城郭へ着御惣勢栗田口アリ前

後ノ河精ヲ整一次第ヲ守テ魏々トノ入洛ノ後

拒ル一番ハ上野馬崎城主酒井宮内太輔家次力

組牧野駿河守忠成大上野内藤左馬次政长上佐上貫小

笠原左衛門佐政信本武藏二番ハ信濃川中島城主

松平上総介志輝朝臣三番常陸城主松平安房守信

吉力組松平甲斐守忠良下松平丹後守康长

下総百 松平因防守康重常陸同城主 四番最上出羽守

河城主 松平因防守康重常陸同城主 四番最上出羽守

義光五番出羽秋 佐竹右京大夫義直六番陸奥同城主

南部信濃守利直七番日同城主鳥居左京亮志政各

一組宛江府ヲ祭ニ去月廿九日前勅柳原康政京

着ニ以来廿七日ノ間旅行人馬絡繹ノ驛舎ノ

繁栄迫世未聞ト云云

廿九日 台徳公伏見ノ城ヨリ御入洛参内

ヲ遂テ是去冬兼官ニ玉ノ右近衛大將拜賀ノ

為ト云々直ニ二條ノ城一渡御當城ヲ以テ假館

卜定ノ玉ヲ

或曰加賀莫門利長嗣子大千代ヲ携へ出京
ノ西君ニ謁ヲ執レム 神君ハ大千代ヨリ
黄金三十枚加賀維三百端時服三十献ニ
徳公ノ同五十枚五百端時服五十進上旦利長
ヨリ黄金三十枚加賀維三百端ヲ捧ク 西公
ヨリ大千代ニ刀服差ヲ賜リ在京ス

四月大

五日 台徳公金表法印素玄カ完ハ渡御脱晩
及テ千利休カ門人古田織部正重熱カ亭ハ台駕
ヲ寄ラレ契奉リ献ス

七日 勅ノ 神君ニ征夷大將軍ノ任ヲ聽リ
玉ノ是當朝日辭讓ノ表ヲ献セラルニ一十リ

川世ニ大御所
ト本祐スト云

八日 神君伏見ヨリ二條ノ城ニ渡御アリ

十日 神君御参ニ内ト云

十二日 豊臣秀頼右大臣ニ任ス

十五日 神君ニ條ヨリ伏見城ニ還御

十六日 勅使廣橋權大納言兼勝鳥丸權中納
言光豊ニ條ノ城ニ夫臨 勅詔ヲ述テ 台徳公

征夷大將軍ニ補セラルニ内大臣正二位ニ任叙ス

天淳和特字西院別當ヲ兼テ源氏ノ長者ト
ナリ牛車ヲ聽テ兵杖ヲ賜フ宣命使ハ西河院
ヲ納言時直參任辨ハ小川坊城左中辨俊昌告使
ハ源康總外託ハ中原師生官務ハ小槻孝亮ナリ
其規成悉ク慶長八卯年神君大樹御拜任ノ
例ヲ如シ越前參議秀康卿正三位ニ叙シ權中納
言ニ任シ尾張侍從兼薩摩守志吉朝臣從三位ニ
叙シ左中將ニ任シ上總介忠輝朝臣從四位下ニ
叙シ左中將ニ任シ池田右衛門督利隆侍從ニ任
又後改武京極忠高正五位下ニ叙シ侍從ニ任又

其外從五位下ニ叙スル輩柳原康勝江守松平定
重任越中守板倉重宗任因防守同重昌任内膳正高力忠房任左近大夫
牧野信成任内通及永井尚政任信濃守青山幸成任雅治大夫後改大藏
輔高木正次任水正松平正朝任貴岐守大久保教隆任右京亮
同幸信任膳正是皆累代人臣等カ子弟也青山常陸
介忠成ハ播磨守ト改ム

十七日 神君伏見ノ城ヨリ二條ノ城ニ渡御
二 友堂家説ニ和泉守高虎忠誠厚ク頃日家老
ノ質子ヲ獻シ其上ニテ諸家ノ長臣等カ質人
ヲ武江ニ收メ置キ可出旨密々言上セシム

大久保与次郎

表川金右衛門氏俊

高木九兵衛正次

柙原石見政次

六番 白丁 十二人

七番 諸大夫 八十二人 步行

松平阿波守至鎮

淺野系女正 長次

松平越中守定綱

柙原遠江守 康勝

青山伯耆守忠俊

阿部備中守 正次

佐野修理大夫正綱

仙石越前守 秀久

大久保右京亮教隆

青山雅玉介 幸成

高力左近大夫志房

小出信濃守 吉親

石川玄蕃及康長

真田伊豆守 信幸

内藤帯刀左近志興

大久保主膳正幸信

有馬玄蕃及豊氏

加藤左馬介 嘉明

九鬼長門守守隆

池田備中守 長吉

佐藤駿河守賢志

山崎左馬介 家盛

中川修理大夫秀成

古田兵部少輔重勝

澁川豊前守忌往

戸川肥後守 達安

佐々流路守行政

山城宮内少輔志之

稻葉藏人 道通

佐々信濃守

津田長門守信成

金表出雲守 可重

毛利伊勢守長高

三好丹後守

寺沢志摩守廣高

畠田信濃守知信

水野河内守清忠

服坂流路守安元

土方丹後守雄重

生駒左近大夫正後

桑山伊賀守貞晴

水野市正 迫勝

竹中伊豆守重門

池田備後守知政

三好因幡守一任

佐久間河内守信實

渡辺筑後守

藤堂佑渡守高虎

徳永左馬介可昌

能勢伊豫守

本多常陸守

本多大學助 正吉

十番 服坂主水正安次

土屋民部少輔忠直

鍋嶋和泉守

諏訪因幡守頼永

柴田筑後守康久

溝口伊豆守宣政

鳥居土佐守成次

池田丹後守

堀 伊賀守利重

日下部伊豫守定好

田中隼人正

内藤若狭守清次

新庄越前守直定

古田左近大夫重恒

北條左衛門大夫氏勝

永井信濃守尚政

羽柴壹岐守正利

堀 流路守直昇

表川内膳正 重俊

土方河内守 雄久

松下右兵衛尉宣綱

牧野豊前守 信成

水野隼人正志清

溝口伯耆守 宣勝

西尾周播守

板倉周防守 宣宗

渡辺山城守茂

土井大炊頭 利勝

大久保如賀守忠常

井伊掃部頭 直孝

八番 陷刀

九番 布衣四人 二行

安藤治右兵衛正次

小沢瀨兵衛忠重

久永源兵衛 重知

倉橋内通 久次

十番 台徳公御車

十一番 布衣八人 二行

松平勘次

安藤与十郎正次

本多百女信勝

松平与十郎秀信

服部伴 保次

服部与十郎政信

渡辺平四郎宗綱

小栗庄次郎政信

十二番 牛飼二人 牛二匹

白丁五人 持搦一人

十三番 御傘

十四番 布衣十六人 二行

村越内膳

神尾五兵衛守世

島田庄五郎

河村善次郎重久

久貝志三郎志俊

小栗甚六郎

陰山佑介

内藤久五郎成次

山口小平次重克

興津久七郎

今村彦兵衛重良

中根喜八郎

長谷川讚岐政尚

山岡五郎作景长

三宅羊七郎

天野左兵衛

十五番 烏帽子素袍ノ士十八人

騎馬

十六番 御劔役酒井宮内大輔家次

各一人

十七番 同人长刀持一傘持

十八番 同人歩士十八人

十九番 諸大夫十六人 騎馬二行

左

右

松平安房守志吉

小笠原信濃守志備

松平甲斐守信吉

松平丹波守康长

松平周防守康重

小笠原左衛門佑信之

本多伊勢守康紀

本多出雲守志朝

皆川志摩守隆唐

牧野駿河守志成

鳥居左京亮志政

内藤左馬介政长

平岩主計頭親吉

大久保相模守志隣

酒井右兵衛大夫志世

柳原式部大輔康政

右前長刀并歩士十二人後二筆并
後士十五人

二十番 侍後以上十二人 各塗輿

朱澤中納言景勝 豊浦参議秀元

若狭参議高次 仙臺少将政宗

薩摩少将忠恒 安藝少将正則

河中嶋少将志輝 秋田待從美宣

最上待從義光 越後待從秀治

會津待從秀行 加賀待從利光

御進献ノ次序 當今ハ白銀千枚 廿御御方ハ

白銀百枚 儲君ハ白銀百枚 廿院御所ハ白銀

二百枚其外長橋局以下廿官ハ白銀二百枚是ク

授与ニ玉ヲ卜云ク

廿七日 公御殿上人二條ノ城ニ至リ將軍宣

下内府御拜仕ノ賀詞ヲ述ル晚ニ及テ台徳公

二條ノ城ヨリ伏見ノ城ハ還御

廿九日 赤井五郎佐忠家享年五十七歳ニ

卒ス其遺領二千石ヲ長男豊後守忠泰ニ賜フ忠

泰當時領スル処ノ千石ヲハ其才六兵衛公雄ニ

授ケラレ

五月小

朔日 列候各伏見ノ城ニ登リ將軍ニ宣下ノ

大札滞ナク果ル下ヲ賀ニ奉ル関西ノ大小名ハ

白銀時服ヲ献シ譜代ノ諸將ハ太刀馬代百兩銀

是ヲ献上ス

二日 將軍 宣下ノ賀儀トシテ様ホク催シ伏

見ノ城ニテ諸候諸士ヲ饗セラル觀世金春金剛

保生舞曲ス

四日 一昨日殘ル所ノ諸候諸士ヲ饗シ觀世

金春西座ノ様ホク與行ニ玉フ 神君兩日氏ニ

月見ノ櫓ヨリ 台覽様ホ等カ其藝ノ得失ヲ論

セラル

八日 前政阜黄門秀信卿享年二十二歳ニシテ

高野山ニ爰死ス 謚大善院 是ハ信長公ノ嫡孫ニ是日

神君ヨリ高臺院湖月尼公ヲ以テ秀頼ノ上洛ヲ

催サル所母堂淀殿一圓許客ナリ卷説ニ福寫如

藤等秀頼ノ上京ヲ制止スル旨必干文越起ル一キ

歟卜洛高等危殆ヲ懷クト云ク

十一日 台徳公ノ御名代トシテ女將志輝朝臣

大坂ニ赴ク考程厚ク饗ス今度上京ノ加賀利長
上杉景勝ヲ始國東北國ノ大小名段々飯國ス

十三日 土佐國主山内忠義カ養嗣左分一西

公ノ拜詣ス後豊かち忠實ト稱ス実神君松平

隠岐守定勝カ娘ヲ養テ是ニ嫁ス一昔ヲ約シ

山内父子 短刀ヲ賜フ

十五日 台徳公伏見ヲ桑途ニ玉ヲ甚雨工一

膳所城ニ御止宿アリ

十六日 水口ノ旅管ニ着御

十七日 龜山ノ城ニ着御

十八日 桑名ノ城ヲ着御翌日御是日佐橋甚

兵束吉久享年五十九歳ニメ卒ス始ハ乱之如ト

稱ニ軍功アリ殊ニ射術ニ達シ 台徳公ノ御師

範ト云ク

廿日 清洲ノ城ニ着御亦續大雨工一屢御還

留川々洪水ト云ク

廿四日 快晴ニ依テ清洲ヲ出御ト云ク

廿六日 尾陽陪臣甲賀左馬女一兩月以前傍

輩ノ奴僕ヲ拵擲セシム其主人小祿ニメ僅ニ被

官六人アリニカ一列メ今日左馬女海東郡津島

へ赴く飯路ニ待儲介左馬允并若黨四人中間一
人ヲ撃取其後黨六人ノ内一人深平負ト云へ氏
殘ル五人恙ナク逐電スへキ所ニ彼平負ヲ以テ
一室ニ取籠リ恙ク自殺ス兼テ其妻子ヲ落シ死
ヲ決スル志ノ程世ニ称訖ス頃日武江ニ旅テ
台徳公近臣ノ奴僕ト越前黄門秀康郷隱臣ノ悻
士等ト遺恨アリテ荷擔ノ旅^{族互}至ニ多クメ双方ニ
三十人同死ニ畢コヌ

下旬豫列宇和島ノ城主富田信濃守知治ト
備中椽掛ノ邑主浮田左京亮成^{後改坂崎}正對馬守ト確

執アリ其故ハ左京亮達乱ニノ眾十キ小姓ヲ斬
戮ス爰ニ成正カ甥浮田左門ト云フ臣彼小姓ト
男色ノ契ヲナシテ恨ヲ含シテ討平ノ者ヲ
害シ信濃守カ許へ走ル成正其憤斜ナラヌメ富
田カ方へ書ク里ニ彼殺害人ヲ出スへキ旨ヲ請フ
処ニ信濃守毒^{別成}根^正憐ニテ出サヌメ逐電ノ由
ヲ答ラ左京亮強訴セト欲ス

是月塙川新右弟門親元ヨリ五代ノ孫新右
弟門親當入道カ標卒ヌ是人ハ元^光濠院義輝將軍
ノ時丹波人相野河内ノ塙振寺ノ邑ヲ領シ今ニ

足利家絶了後ハ土列ニ高居シ園原以後幕府
ニ仕一五百石ヲ領ス

六月大

四日 台徳公武城ニ遷入シ玉フ

十四日 伏見中白雨降ル洛中ハ雨降ス先月

ヨリ世上早熟ス揚列昆野ノ池洞洞ヲ莫悉ク死ス

十八日 加賀黄門利去致仕人養子筑前守利

光後常一加賀能登越中ノ三列無ヲ興相違宛行ル

廿二日 花房越後守正幸享年八十二歳ニシテ

卒ス 志广守正
成カ又也

廿八日 大沢左兵衛門佐基胤享年八十歳ニシテ

卒ス

同日 夜半降雨大旱ノ上タルニ世ノ人欣

悦ス

七月小

五日 神君諸牧ニ命メ伏見ノ城ヲ修筑セ

ラル故暫本城ヨリ西ノ曲輪ニ移リ玉フ

七日 使番安藤治右兵衛門正次江府ヨリ伏見

城營邊トノ上著ス

十七日 杉浦孫兵衛忠綱六十七歳ニシテ卒ス

高右衛門親次ノ弟ニシテ
初ノ北條氏政ニ仕ヘリ

十九日 常列ノ配取ニ於テ前参議大伴義統
入道宗嚴卒ス是ハ大周秀吉ヨリ領国没収ノ取
戻子ニ石田ニ屬シ尚又謫流セラル者ナリ

廿日 江濃勢尾参五ヶ国洪水ト云ク

廿一日 伏見城中終補ニ依テ 神君二條ノ

營ニ移ラセ玉フ林又三郎信勝力英寸博恰既ニ

上聽ヲ歷テ永井直勝ヲ以テ俄ニ召出サレ一日

船橋清康秀覺宛長老信長侍座ス 神君林氏

ニ後漢光武ノ檀柔前漢武帝ノ及況者ノ出所ヲ

問セ玉フ処書下ニ委曲ヲ演テ 台聽ヲ驚カセ

奉ル羅山文集
ニ見ユル

廿二日 参沢矢作川ヲ通スヘキ為ニ未津ニ

津ヲ堰ビテ國中ノ高役百石ニ給人ヨリハ人夫

二人庶民ハ一人宛ヲ積ラ以テ彼川ヲ浚セラル

八月大

十二日 神君二條ヨリ伏見へ遷御此間坂東

大洪水ニ

九月小

十三日 秋田東左郎實季本姓女信 城分後五

位下ニ任叙ス

十五日 神君伏見ヲ發興ヒ玉ヲ忠輝及直頼

宣ノ衆子供奉セラルル 御旅泊永原彦根赤坂ニ

此内彦根ニテ雨天兩日御

廿日 岐阜ニ著御 翌日御滞座アリテ指葉山

ヲ得土佐ノ国主從四位下忠實享年六十歳ニ

卒ス 初山内権右衛門一豊ト稱シ

廿二日 清洲ノ城ニ入御 兩日御滞座ノ間忠

備ニ台覽ニ

廿五日 岡崎ノ城ニ至ラセ玉ヲ 疾ニ四ヶ日御滞留ナリ

十月小

朔日 神君遠列中泉ニ着御教日櫛ヒ玉ヲ

七日 武列入間群 郡ニ於テ渡辺源治冲綱享年

七十九歳ニシテ卒ス是御當家ノ功臣ト云ヘ氏一

向宗門ノ從鋒権人時冲綱是ニ與ニ遂ニ沉淪ス

長兵未長綱カ子ナリ

十七日 神君駿列田中ノ城ニ著御

廿五日 勢原長嶋ノ城主菅沼志广守定仍享

年三十歳ニシテ卒去ス其父織部正定盈去年八月

ニ卒ニ定盈力事 榑井ノ松平監 又嚮ニ没スト

云々

北八日 神君江城ニ着御

十一月大

二日 始テ書院書四組ヲ置ル其頃ハ水野隼

守志後内藤若狭守松平越中守志堂ナリ

十日 台徳公鴻ノ果ニ遊獵ニ玉テ是日松平

備後守清宗享年六十八歳ニノ卒ス是ハ竹谷ノ

松平備後守清善カ子ニテ勇名ナリ當時ハ退隱

セシムル所ナリ

十七日 神君忍川越鴻ノ果ニ將ニ玉テ

北日 台徳公放鷹ノ事終テ江城ニ皈リ玉テ

北五日 台徳公常列築波山ニ 神領五百石

御寄附ト云々是 神君ノ命ニ依テナリ

廿六日 神君武江ニ遷入ニ玉テ

是月 酒井右兵衛大夫志世ハ在京ノ時馬劔

領トメ江列日野五千石ヲ賜フ松平右兵衛門政

清卒ス是ハ始鳥居彦右衛門元忠ニ屬スル也

神君召テ直臣ニ列セラレ遠列ノ内ニ於テ堪忍

方々揚リ折節 台前ニ出ルノニニ其子六右衛門

正重大番束トナリ阿部備中守正次力部下ス

是月ヨリ臘月ニ至テ信列後同山焼ル
十二月小

二日 往年伊列ヨリ参列ニ来リ御當家一軍
志ヲ竭シ鬼神藏ト稱セラレシ服部石見守正成
カ彌子市平保後永禄年中参及高橋ニ於テ忠死
ス依之孝子弥左衛門家督ヲ継テ平藏ト改メ石
見守トナリ三千石ヲ領シ 神君異種同胞ノ連
枝松平隠岐守定勝カ娘松尾ヲ妻トシテ弥兵衛
式部浪兵衛等ノ数子ナリ驕奢ニシテ己カ組ノ伊

質素生ノ後同心等ヲ信後ニ唯ニ召仕テ適々皆
列者ヲ八月俸ヲ抑留セシカハ二百人一列ニ奉
行所ニ訴ヘテ武江^敷カ橋ノ寺院ニ取籠リ訴詔
逐サレニ於テハ斬死セシト企ル 上聽ヲ
歴テ石見守組中ヲ其後中服部仲保正大久保甚
右串門忠直久永源兵衛重知加藤勘右串門正次
ニ分割メ支配スヘキ旨 命セラルル処石見守彦
一 訴ノ残本十人ヲ賜リ派セシト願ヒケレハ今度
隊長ト十三^四輩ヲメ彼十人ヲ裁セラルル処八人
ヲハ誅ニ残ル二人逐電ニ其往所ヲ知ス石見守

怒ヲ従者ヲ以テ深ク探ニ求ルニ或日腋部カ門
外ヲ右逐電ノ者往及スト例テ走リ出斬止テ紀不
処ニ彼伊質ノ者ニ推スノ伊奈備前守忠正カ僕
従ノ使節ニ行ク誤リテ害スルニ紛テハ右
見守大ニ驚キ忠正カ方ニ陳謝スレ凡白晝ノ下
見語ルハキニ激ストテ兼引セス其上頃日江府
ニテ過斬如ル工ニ奉行取ヨリ街ニ属託金ヲ掛
置其殺害人ヲ訴一出ハキ旨沙汰スル折柄ナレ
ハ右ノ横逆モ腋部カ取為歟ト群疑紛々トメ道
シ難ク右見守領知ヲ没収セラレ定勝カ封内ニ

塾居スト云ニ 卷長日記昭代目錄
腋部家説皆曰シ

十日 公子尾張ノ大守薩广守忠吉卿當十月
上旬ヨリ腫物ヲ患ヘ玉ヲ所逐ニ心神惱乱セラ
レ既ニ今辰ノ刻絶入アリニカ良薬ノ効ヲ以テ
午ノ刻蘇生ニ玉ヲ

十五日 志吉卿取方日ニ大驥ト云ニ 台徳
公欣然不斜南海洪波ハ大島ノ辺洋中ニ今一夜
ノ間ニ一島湧出又

西川如見カ曰漢朝ニモ平地忽ニ堆阜ニ成
山島涌出スル例有リ本朝ニモ 康帝ノ

天寶
太平盛字年中薩列鹿兒嶋信爾村ノ海中ニ沙
石自然ニ聚化ノ三島トナリ 景行天皇十年
庚辰江列ノ湖中ニ竹生嶋始テ涌出ス 舒明
天皇三年辛卯豊列ノ海ニ一島忽涌出スル
ハ實ニ其理アリ大風ニ依テ海底ノ沙石ヲ漲
リ來リ堆阜ヲナシ安其海底ノ伏陽發出スル
ノ時洪波アリテ沙石ヲ漲リ來リ聚メテ一島
トナル所ナリ寛文年中洪波ノ節泉南塚ノ海
中ニ沙石唯阜ヲナシ今惠美須島ト号シ廻航
ノ便トス各小嶋ナル者ナリ一廻程ノ大島或

ハ国内ニモ大山ノ涌出スルノ理ハ曾テ是ナ
リト云々

廿六日 神君忍川越ノ遊操畢テ江城ニ還御
酉ノ刻伏見ニ於テ有馬豊氏カ宅ヨリ失火大浦
生秀行淺野長政松平飛騨守志昌彦坂平助石川
主殿頭志總大久保石見守長安板倉伊賀守勝重
真田隱岐守信尹遠山民部少輔カ家屋且亦立賣
ノ市店焼亡ス

御前ニテ首服ヲ如ク御諱ノ字并一文字ノ刀鳥

天寶
大平盛字年中薩列鹿兒嶋信爾村ノ海中ニ沙
石自然ニ聚化ノ三島トナル 景行天皇十年
庚辰江列ノ湖中ニ竹生嶋始テ涌出ス 舒明
天皇三年辛卯豊列ノ海ニ一島忽涌出スル
ハ實ニ其理アリ大風ニ依テ海底ノ沙石ヲ漲
リ來リ堆阜ヲナシ安其海底ノ伏陽發出スル
ノ時洪波アリテ沙石ヲ漲リ來リ聚メテ一島
トナル所ナリ寛文年中洪波ノ節泉南塚ノ海
中ニ沙石唯阜ヲナシ今惠美須島ト号ニ廻航
ノ便トス各小嶋ナル者ナリ一回程ノ大島或

ハ国内ニモ大山ノ涌出スルノ理ハ曾テ是十
ニト云々
廿六日 神君忍川越ノ遊操畢テ江城ニ還御
酉ノ刻伏見ニ於テ有馬豊氏カ宅ヨリ失火火痛
生秀行淺野長政松平飛騨守志昌彦坂平助石川
主殿頭志總大久保石見守長安板倉伊賀守勝重
真田隱岐守信尹遠山民部少輔カ家屋且亦立賣
ノ市店焼亡ス

是月諏訪安藝守頼永カ子小太郎 台徳公ノ
御前ニテ首服ヲ加テ御諱ノ字并一文字ノ刀鳥

帽子素袍ヲ賜リ志澄ト祐ス後年出雲守ニ任ス

今年先帝ノ御^進返答トノ禁闕ニ於テ南都

比嶺園城寺ノ衆僧ヲ召テ御八講ノ法會アリ其

用白ク各訥望又時ニ先例ノ通リ學問善量ニ依

テ初トセラルヘキ旨編年アル処ニ叡山是ク

憤リ出仕ニ及ハス此下園東一御沙汰アリニカ

神君モ又勅誡ノ旨御領掌向後如此相定ラレ

可ナラニ由御返答ニ及テト云

東宮ノ御外戚近衛信基公ハ純才ノ善タレク

以テ園白職ニ任セラレ薨去以後三院殿ト號

スル是信ヲ信輔或信ヲト改ム

台徳公榊原式部大輔康政カ娘ヲ養ハセ玉ヒ

池田輝政長子右衛門督後武藏守利隆一入與ノ

規式甚ク嚴重ク青山掃磨守志成與ク利隆ノ長

臣伊木長門ニ渡シ貝桶ヲ土井大炊頭利勝相渡

又且利隆ヲ後日營中ニ享セラル伴食ハ淺野彈

正少將黒田元前守ノ西加藤輝頼阿波守至鎮

淺野紀伊守幸長等彼響應ク奉行ス台徳公ヨ

リ青江ノ刀左文字ノ服差良蹄ニ匹ヲ賜フ

神君江府ニ於テ或方一渡御有テ御飯

城ノ時牧野傳藏成里里今年砲卒五十人ノ隊長
トナリ大千人ノ門今ノ百人ヲ守リ其頃ノ風俗
ニテ三男五六歳四ヲ携ヘ躄蹠ス 神君違ニ
台覽成里 召テ彼稚子ヲ尋玉ヒ忽渠ヲ追ク
呼セラレ汝年齢ヨリ遠カ其長大ニメ壯勇ノ
相アリ今ヨリメ 大樹ニ仕ヘ志ヲ盡スヘニ
ト仰タリ又成里ヲ伊豫守ニ任スヘキ間傳藏
ノ名ヲ五六ニ讓ルヘキ由成里命ヲ蒙フリ拜
謝ス伊豫守ニ三子アリ一男ハ將造成信ト稱
シ此時未タ播列ニアリテ自然ニ池田家ノ賓

客タリ後洛陽東山ニ住ニ風車軒任化禪門ト
号ス其進封博ノ雅子ル下 後水尾帝 敵國ニ
及ヒ 御落飾ノ後 仙駕ヲ枉テレ 敵覽下
リ二男ハ今右忠門成教是モ種政カ許ニ在テ
近侍ス成純ハ三男ト云ヘ長幼雅ニ母ニ隨
テ早ク東武ニ下向スルヲ以テ嬌子トナリ後
年御使番ヲ勤ムト云々
一柳造物直盛カニ男直重八歳時眞子トテ江都
ニ至ル日係俸八十人分ヲ賜ハル後年美佐守ニ任
タルハ是ナリ

徳山五玄未直政落後ノ法眼ニ任ス是ハ五兵
米則秀八道ニ任法印カ子ナリ
後藤庄三郎光次ニ命ニ金壹分判ヲ始テ造
セラル其重目壹錢目二分ナリ

●奥列四家合考ニ曰頃年夷狄ノ傳未トテ煙
草ト云物諸人好ニテ是ヲ吸フ終ニ是年奥列
ノ地ニテ流布スト云々

慶長日記ニ曰去年洛陽拮据屋道因カ商舶
洋中ニ於テ東乞礼須ノ夷南蛮ノ黑船ヲ侵シ
禄^掠ル取^取ノ棄懸リ莫大ノ利多ヲ得テ飯朝スル

ニ徹シ京大坂堺ノ商賈等船若干ヲ東京還羅
呂宋一渡海セシメサレ取ニ一艘モ飯朝スル
ナリ且風波船ヲ覆シケル歟賊船ノ難ニ^臨陣リ
ケル歟其胡^故ヲ知ス

洛陽万年山相国寺ノ法堂宮作ノ為ニ米穀
一万五千石ヲ秀頼寄附之

徳山王色直政信... 右利衛... 慶長十一年... 木村高敦撰

武徳編年集成卷之五十二

木村高敦撰

慶長十一年午年

正月大

元日神君一合徳公御封顔歳且ヲ祝ニ玉

ノ諸士参賀其例式異十ル工ト十ニ

五日五節太九長福丸正五位下ニ叙セテ

右兵衛督義利帝陸女頼宣卜栞ニ玉ヲ義利後ニ

ルヲ

十九日江城経営ノ工トヲ池田右衛門督利

隆後改武藏守其弟藤松利純後任左福篤左東門大夫

正則加藤肥後守清正加藤左馬女嘉明黑田胤前

守長政細川内記忠利京極若狭守忠高同丹後守

高知淡野但馬守長晟松平土佐守一豊右馬玄蕃

頭豊氏鎬島信濃守勝茂右近大夫忠政寺沢志

摩守廣高命也ラルル今日洛陽三十三間堂ノ

縁ニ於テ諸候ノ陪臣強弓ノ誓アリ筆通矢ヲ射

ル尾陽候志吉君ノ後士朝岡平兵衛五十一本射

通又足堂前天下第一ノ遺鶴ナリ葉ハ石堂竹林坊

如成力高弟ト云

二十日 筑後国主田中兵部少輔吉政力嫡男

主膳時ニ二十歳 近來乱心ニ家臣五十三人ヲ弔ニ

今日兎扈從ヲ誅スルトテ却テ弑セラル

二十五日 台徳公ノ執事青山播磨守志成初

帝陸内藤修理亮清成 神君ノ御鷹場ニ於テ鳥

網ヲ張置処 神君野外御放鷹ノ序ニ 上覧ア

リテ其實ヲ亂サレ御怒リ不斜工ニ 台徳公兩

臣ヲ勅殺セラル

頃日 奥平大膳大夫家昌カ江府ノ宅庭上ニ

生首アリ且居城宇都宮ノ郭内ニアリニ旗竿ノ

上ニ塔鳩印ヲ十二是ヲ生ム羽翼既ニ成翱翔ス

彦坂小刑部直通支配所ノ里民訴フル旨アリ

直通仕置非法ニ決ヒ且貢税ノ私曲アルニテ其

子兩人ト長ニ禁錮セラル

二月大

八日 江府櫻田仙臺少將政宗カ宅ニ神君

渡御長光刀其外敷品且在京ノ刻鳥留料トヒテ

江列藩生野洲西郡ノ内一万石ヲ賜ハシ其子若

狭守忠宗ニ大原真守ノカヲ授ケラル此後往々

諸侯ノ宅ニ渡御アリト云々

十日 江城經營手傳ノ諸侯武江ニ群參ヒ陪

臣ヲ豆列ニ遣ヒ石ヲ運送セシム惣船數三千艘

但ニ一艘ノ中ニ百人持ノ石ニツテ入其價白銀

栗石價珠ニ高直一坪ノ分関東ノ諸侯ハ去年

台徳公御上洛ノ供奉ヲ勉ルニ工ニ此課役免許セ

ラレ其餘扈從ノ列タラサル輩ハ高千石ニ人先

一人免ヲ課テル

十九日 台徳公伊達政宗亭ニ渡御淺野彈

正女彌長政加藤左馬女嘉明伴食タリ

二十五日 那須資宗九京大夫後五位下ニ任
叙入修理大夫資
暗カ子ナリ

是月 野列宇都宮山上ニ旗雲頭ハル

三月小

朔日 江城經始本城ハ矩繩元ノ如ニ二三ノ

九ハ友堂和泉守高虎繩張ヲ以テ郭内ヲ廣クシ

石垣高廿十間十二三間惣石垣ノ分七百餘間ト

云々佐入同河内守正實奉行之

三日 神君上洛トノ今日御出輿ノ旨兼テ相

極ル処甚雨ニ一延滞セラル越前黄門ノ嫡男長

吉丸 台徳公ノ御前ニテ元服 御諱字ヲ授ケ

ラレ参河守忠直ト稱ニ且右近衛權方將從四位

下ニ任叙セラレ

四日 氷降り且雷鳴スト云々

十五日 神君江城ヲ祭途ニ玉ヲ御旅泊ノ次

弟神奈川藤沃小田原三嶋清水ト云々

二十日 駿府ニ 著御當城主内友豊前守信

成ク來歲得替アラシメ 神君御退隱ノ城郭ヲ

以テ申由ニテ四ケ日爰ニ御滞坐城ノ内外ヲ巡

視ニ至ス

二十五日 田中ノ城ニ至ラセ玉フ

二十六日 中泉ノ旅管ニ着御是ヨリ西地

是月 御當家ノ功臣安倍四郎兵衛忠政カ子

善太夫重真ハ又忠政御家ノ立退ク刻蒲生氏御

二屬ニテ九戸修理政實カ居城ヲ攻ル時重真火

箭ヲ郭内ニ射込世々ヲ術明達ノ譽ヲ頭ハニ其

後蒲生家臣數百人黨ヲ立テ會津ヲ立退ク時重

真是ノ遂テ其長ク射殺ス固ヨリ勇烈ト云第

御當家ノ世臣又ルヲ以テ祿ヲ授ケ昵近ニ列セ

ラレ後四郎兵衛ト改タム重真カ弟正之ニ

台徳公ノ書院當士ト成ト云ク後祿四郎五郎是ナリ

今春 柳原七郎右衛門久政ヲ館林ヨリ召シ

駿列久能ノ城ヲ守ラシメ三千石ヲ賜フ是人三

郎信康君ヲ輔佐シケルカ彼生害アリニ時ヨリ

祿ヲ奪テ其身式部大輔康政カ家ニ蟄居ス當城

ル慶長六年辛巳年以來大久保孫三郎忠政景代忠

勤アルヲ以テ輕卒ヲ預ケ守ラシメラレ

四月大

七日 神君伏見ノ城ニ着御シ玉フ

十一日 江城天守ノ經營伊達政宗誨望ノ其

二重目ヲ經始入一キニ味ニ彼繪圖ヲ政宗力臣

梅村出羽ニ渡サレ

二十四日 赤井刑部少輔幸家卒又其子最右

八往年信列上田ニ於テ志死ス

二十八日 神君御入洛參 内遂テ昂日伏

見ノ城一赴力也玉七御滞留ト云ク

二十九日 武經七書同板功成テ今日ヨリ世

ニ行ハル伏見石垣一石以下是ヲ築ク是ハ万

石以上ハ駿武ノ城稱ヲ沙汰スル故ナリ

洛陽万年山相國寺ニテ山門建立ス是備前金

吾黃門秀秋没後米穀二万石倉庫ニ在テ池田輝

政去年以來是ヲ借用ニ今度 公命ヲ受テ彼寺

ニ寄進スルヲ以テ山門ヲ造營スト云ク

五月小

朔日 駿列久能ノ警衛神原七郎右衛門久政

享年六十一歳ニノ卒ス是内記清久後改カ父十

リ後ニ清久ヲ久能山人守衛トセラレ

初五日 烈風甚雨江府品川ノ沖ニ於テ城築ノ

夕ノ運送スル石舩若干破レ海底ニ沉ム孰中加

友左馬舩四十六艘黒田筑前守舩三十艘鎬島

信濃守舟二十艘ト云々

六日御當家干城ノ三傑其一貞上列館林ノ
城主榊原式部大輔源康政^疔腫ヲ患フ台徳公
尊慮ヲ愍ニサレ酒井右兵衛大夫忠世土井大炊
頭利勝ヲ館林ニ遣ハサレ良醫今大路玄朔同去
鑑ヲ以テ療養ヲ加ヘシメ玉フ康政其腫物大切
ニノ死ニ臨ニテラ察ニ家中ノ政務陳法ノ書ヲ
其子遠江守康勝ニ譲リ意氣洋洋トノ平日ニ替
ルヲナシ

十四日巳ノ刻館林ニ於テ榊原康政享年五

十九歳ニノ卒ス法諱ヲ見白ト謚ス其臣南甚之
以殉死ス台徳公阿部備中守正次ヲ館林ニ遣
己喪ヲ訊玉フ今年之刻神君ノ妾西郷ノ方卒
去蓮葉院日淨ト号ス今川友元ノ臣参州西郷ノ
城主鶴殿長友長持カ孫ニノ友太郎長照カ娘十
リ

二十六日越後国主從四位下行侍從兼左束
門督友原秀治享年三十一歳ニノ卒去ス其子久
太郎僅ニ十一歳ト云ヘト王家督ヲ襲フ後越後
守忠俊ト云フ是ナリ

十頃日 伏見松ノ丸加番松平若狭守正吉好色
久頼ニ依テ領知ヲ没収セラルル是ハ伏見城ニテ
庚子ニ戦死スル大給ノ支流五左衛門正力次
男ナリ

六月大

四日 駿府ノ城築営来月朔日事始リ夕ル一
キニ決スル処来正月ニテ延引ノ由 命アリ
十日 江城ノ経営組々ヲ分ラレ大畧造畢ノ
福島正則力組合ハ残取ナク其功ヲ遂ルニ依テ
休暇ヲ賜ハリ武江ヲ發ス未タ功ヲ終サレ輩モ

下夫人夫ヲ残ヒテ其身ハ帰國ス一ト云々然
トトモ一万石ニ百人持ノ巨石ニツ宛ノ積リ献
ス一キ旨 命アリ時ニ加茂清正諸將ヲ勸メ彼
大石百二百五十三宛ヲ各献ヒ畢ニス頗ル御
喜悅ト云々今度經營ノ間ニ福島左衛門大夫家
ヲ出奔ノ奴婢池田輝政家ニ仕一他行ス折柄福
寛力僕従是ヲ見咎ノ直ニ門内ニ附込テ輝政ノ
厨ノ前ニ捕フル処ニ池田家ノ雜卒出向ヒ狼
藉者ナリトテ正則力奴僕ヲ搦捕左衛門大夫是
ヲ因テ江城普請中斷諍ヲ禁セラレ然モ事ヲ起

又方一族之テ眾セラル一キ提タル如ニ吾奴隸
如是ノ違犯ノ科勿論ナリトテ彼女ト長ニ百壽
死刑セシノ輝政力奴隸必ス眾ス一カヲサレ旨
申送ル正則短慮理不盡ノ氣象タリ知今般穩使
ノ所存ノ由世ニ感ス

二十日 福島正則武江ヨリ飯岡トシテ今日
伏見ニ着ス正則暴虐ニノ領國安藝ノ嚴島ノ先
年毛利元就寄附セシ神領三千石ヲ没倒セケル
カ嶋男刑部大輔正之カ濫行モ彼神爵ナリトテ
今年僅カ五十人扶持ヲ寄附セテ且鳥居一ヶ所

ヲ造立セシムルト云ハトモ當祭祀ノ日ニ代官
山本小兵衛在乱ノ死亡其外怪異亦續ク工一安
藝備後ノ西國甚ク恐怖ノ思ヒヲ懷クト云ク

二十四日 津田長門守信成 領ニ織田左門頼
長右赤子 稻葉甲斐守通廣 兵庫及童 天野周防守

雄光寺沃羊左衛門園田平六等洛外愛宕山ニ諸
之飯路ノ刻彫物師後長兼カ壽賀茂也ヲ道遠
ニ是ニ飯路ニ赴ク知右ノ輩放逸ニ彼女ノ輿ノ
戸ヲ開キ狼藉ニ及ハニトス干時長兼カ伯父後
長兼極老ニテ隨逐セシカ答メテ曰此輿ノ中

ハ後長兼カ事ナリ皆々其客兵ヲ見覺ヘタリ
歴々ニ似合サレ旨罵リケレハ各赤白ノ邊久ト
云々

七月大

八日尾陽忠吉君籠居小笠原監物忠重カ吹
拳ヲ以テ拍テレシ給人ヲ改易セラル志重大ニ
忠吉君ヲ恨コテ禄ヲ弃テ出奔ス是人ハ和泉守
貞朝カ孫和泉守吉吹カ子ナリ男色ヲ以テ寵幸
セラル恩遇厚カリト云々

十三日 内友仁兵未志政享年七十五歳ニノ

卒去ス

二十七日 神君伏見ヨリ御出京ニ條ノ城ニ

御在留ト云々

是月 仙洞御取御造管越前黄門秀康御是ヲ

沙汰セラル

江列坂田郡長濱ノ舊城ヲ修築シテ内友豊前
守信成ヲ末歳駿府ヨリ爰ニ移サレトテ城
築ノ下江美濃ノ大名并飛彈ノ国主金表法印
ニ命セラル長濱ハ越路ヨリ難波ノ要路ト
ルニ信成ヲ以テ守ラシメ北越ノ列候大坂秀

執ノ臣一密策ヲ通ス一キ欽上御遠慮ヲ廻テカ
ル工一ト云々
後發長兼當春洛久賀茂ニ於テ寄合ノ族カ不
法ヲ誦テ神君其輦出テ申披ク一キ旨 余尸
ル所ニ各陳謝ス一キ術ヲ失フ於是津田長門守
信成天野周防守雄光稻葉甲斐守通廣寺沢平左
衛門園田平六領知ラ没収セラレ織田左門親長
ハ有樂カ家督ニ立一カラサル旨ナリ大嶋雲八
阿部右京夫部善七郎野間措之介淳田才壽ニ連
坐ニテ改易ニ及一リ
天野ハ其子佐左衛門雄得
御書院番ヲ勤仕ヒケレハ

其家斷絶ニ及ハス固防守ハ
慶長十四己酉蟄居ス

菅沼志广与定仍カ家督トメ勢列長島ノ戰地
ヲ當時 台徳公近臣左近定芳賜フ是ハ定仍カ
未弟ナリ定仍カ弟主膳定成ハ終ニ東武ニ至テ
甘ル工一其未弟左近カ兄ノ遺跡ヲ純コトヲ定
成憤リ遁世ニケル処江列坂本ニテ無歳程墜死
ス

太田安房守資武入道武庵カ子新六郎重政カ
嫡男未廿歳宗七歳ニメ 神君ニ拜謁ス後備中
守ト稱ス是ナリ
龍安於勝ノ
指子ト云々

八月小

十一日 神君御参 内右兵衛督義直君常陸
公頼宣君從四位下 叙之左近衛權中將 任之
云

十六日 春日社修理料ト米二万俵ト一乘
院門主ニ寄附ニ玉

二十七日 二條ノ館ヨリ伏見ノ城ニ還御ト
云

當春ヨリ洛ノ大高角倉貞順玄之号素庵能其
子与一郎玄徳号巖水巧ヲ能スル工一丹波ヨリ

山城世喜ノ邑嵯峨ニ至リ船ヲ通ス一キ為ニ川
ノ堤ニノラニ如今月成就ニ近境大ニ利潤ヲ得
ルト云々玄之ノ父ハ吉田与七郎光由八道了以
ト稱ニ三代相續才智アリテ交易ノ下ニ精ニク
甚ク富祐ヲ得ルト云々

西尾隱岐守吉次享年七十七歳ニノ卒ス弟ヲ
酒井河内守重忠力三男主水忠永ヲ嗣子トス其
後實子出生セシカハ別ノ御家人ニ列セラレ友
兵衛利氏ト稱ニ千九百石ヲ賜フ

四国中国大風吹テ田園損毛ス

九月大

朔日島津少將忠恒松平ノ御称号御諱字ヲ賜リ家久ト改ム

七日参列成道山大樹寺ハ御當家祖考ノ廟取タル工ノ勅願所ニ准セラレ暹誓上人ノ編旨ヲ賜フ

冬河内大樹寺ヲ勅取不須同志宗弘匠ノ旨ヲ云門新 室積之疆ノ丹積者 備命

少部仍抄送如件
長土年九月七日
江中辨卷系

二十一日 神君坂東御下白トメ伏見ヲ棄途

己王ヲ伏見ニハ秀康御暫御在城ト云ク

保田家傳ニ曰 神君今度水口ノ旅營ニ於

テ保田甚兵衛則宗ヲ御家人ニ列セラレ舊領

三十石ヲ賜フ

二十三日 江城本丸經營造畢 台徳公御移

從ト云ク御連枝鶴千代君 干時四歳 辰秋乾房 一帝列河内

郡下妻五万石ヲ授ケラレ友堂和泉守高虎今般

江城修築ノ矩繩ヲ泐汰スル勞ヲ賞ニ備中ノ内

二万石加一賜フ

十月小

朔日 神君白須賀ノ旅營ニ御滞座是霖雨工

一十リ和列葛下郡新庄ノ領主桑山條理亮シケ重暗

入道治部卿法印宗采卒去行年八十二

六日 駿府ニ着御當城ノ河野邊ノ地ニ移

ニ築カレ一キ旨御沙汰アリト云ク

十一月大

四日 神君江府ニ遷着ヒ玉フ

六日 野別桑名城下大火ト云ク昔山樞磨守忠

成内後修理亮清成嚮ニ神君遊櫛ノ場ニ於テ

細ヲ張鳥ヲ得ルノニニ非ス陳謝ノ詞モ礼ヲ失

フ工一 台徳公御勅氣アリ此上尚其科重カル

一キ旨本多佑渡守正信 神君ノ歎訴ヒ所茶局

等ノ侍女種々ニ 神君ノ歎キニカハ遂ニ御許

容アリテ 台徳公一彼二人カ罪免除ヒ玉フ一

キ旨 釣傘アリ 台徳公御喜悅不斜ノ兩人カ

科ヲ宥メラレ勤仕ス然レ氏元ノ如ク日々ニ昵

迎スル一ハ穩ニ玉ハス頃日評議ヲ凝サレ後府

ノ城ヲ河野邊ノ地ニ移サル一ヲ止ラレ當時ノ

城郭ヲ南北一廣ク築キ出ス一キ旨ニ決ス

十一月一日 台徳公ノ御前ニ於テ越後國主堀久
太郎首服ヲ加フ後四位下侍後ニ任叙シ松平ノ
御称号御諱字ヲ賜リ松平越後守忠俊ト稱ス是
ハ堀左衛門督秀政ノ孫ニシテ左衛門督秀治ノ子
ナリ

十五日 安房ノ国主里見梅鶴九ノ台徳公ノ

御前ニ於テ首服ヲ加フ後四位下ニ叙シ安房守
ニ任シ且御諱字ヲ賜リ忠義ト稱ス

二十一日 神君川越ノ邑ニ侍シ玉ヲ淺野彈
正少弼長政隱居科トシテ常列真壁五万石并江列

受知郡内五千石ヲ賜フ

二十八日 堀太郎左衛門秀重享年七十五歳

ニシテ卒ス是ハ奇友道三人道ノ臣堀掃部少秀澄
ノ子ニシテ豊臣大將ニ仕フト云々

十二月小

二月 神君ノ密旨ニ依テ 台徳公古河下妻
佐竹筋巡視ニ玉ヲヘキ為ニ放鷹ト稱セラル今
日江城御出典ト云々 里見安房守忠義侍後ニ任
ス

二十三日 仙臺政宗ノ息女上總女忠輝主ノ

婚禮アリ勝^勝臣ト已于湊上丹波鈴木茂右衛門坂
將監等與ニ相後ノ是去ル慶長三戌戌ヨリ約セ
テル所ナリ

是月細川忠興ノ宗子内記忠利侍後ニ任ス
酒井与七郎忠勝後五位下備後守ニ任叙ス後讚
岐守是ナリ駿豆ノ代官井出甚久正次後五位下
志摩守ニ任叙ス

是年永承錢通用ヲ止メ薄錢ヲ用テル
豊臣太閤ノ大政所洛東高臺寺ヲ建テル福島
加茂人夫ヲ出シ合カス

對列ノ宗義智使節ヲ以テ言上メ曰先達テ
釣年ヲ蒙フル朝鮮國王和ヲ整フヘクハ信使
來聘スヘト相達スル処是ヲ兼服シ大明ヨリ
遣ニ置守護ノ兵ヲ返シ信使ヲ渡海セシメ既ニ
着岸スト云々 神君依然トメ對列ノ使ニハ脚
カヲ授ケラレ雞林ノ信使ニ米穀十石ヲ鎮西ニ
テ与ヘテ

松平周防守康重カ長臣岡田大和元次カ子内
託元勝御家人ニ列セラル彼大和始竹右衛門ト
稱シ號士タル工ヘ慶長六年己一万石ヲ封シ伏

見ノ城来リ 年セラニ 処尚康重カ家ニ永ク仕
ハニト欲ニ固辞ニケル下リ甚ク御称歎アリテ
今度内託ノ阿茶尾カ子神尾五兵衛守世カ弟ト
指ニ召出サレ後備前守ニ任スル是ナリ

長崎奉行小笠原一庵卒ス其跡後長谷川左兵
衛藤廣ニ命セ玉フ

久保五郎勝周ニ三百石ヲ賜フ是人ノ大猷公
ノ御時 御所附トシテ和泉守ニ任セラル
安彦治右衛門正次ヲ假ニ經營ノ奉行トセラ

ル

柳生但馬守宗巖卒ス二男又右衛門宗矩禄ヲ
襲フ新陰ノ刀術道統ヲ相續ス後任但馬守是ナ

林又三郎信勝武陽ニ下向ニ 台徳公ノ拜謁
ヲ遂テ永ク駿府ニ勤仕ス一キ 御旨ヲ蒙フリ
其師妙壽院惺窩先生ニ餞別ノ為ニ一旦飯京ス
時ニ先生延平回答一卷ヲ信勝ニ授ク是厚キ恩
意ナリ工一ト云々 信勝ハ羅山子道春是也

最初彦坂小刑部直通カ掌ル豆列銀山當時大
久保石見守長安撥断ニ土卜銀卜等分ニ出テ殆

ト佑列ノ銀山ニ均ニ河合作兵束ニ後同心五十
人ヲ附屬セラレ彼山ヲ守ラシノ玉ノ是ハ天正
十五午甲陽ノ士井伊直政ニ附屬セラレ其内
十リニカ年ヲ歴テ家臣ニ准スルヲ怒リ彼家ヲ
去テ流落セシラ頃年五百石ヲ賜ハリ昵近スト
云々

大河内又次郎正勝卒ス是ハ参列ノ任士勘解
由左衛門忠正カ嫡子ニノ天正十八庚寅年以來
武列多摩郡三木村二百五十石ヲ領スト云々

惣列松坂ノ城主古田兵部少輔信勝享年四十

七歳ニシテ卒ス其子重恒幼雅工ハ信勝カ弟大
膳重治ニ家督ヲ賜フト云々

持野右近孝信カ次男尚信生ル其幼名ヲ三位
ト呼ビテ後主馬ト改夕メ別號ニテ自適存ト号
ス慶安三庚寅四十 兄探函存ト優劣ナキ名盡十
五迄ニノ卒ス

